

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 相松慎也

本論文は、道徳判断とそれによって生じると期待される規範性の本性について、ヒュームの著作、特に『人間本性論』第三卷(「道徳について」)および『道徳原理研究』で展開される議論を再解釈することで考察することを試みるものであり、ヒューム研究を越えて、現代のメタ倫理学への寄与をなしうる貴重な洞察を提示する論考である。

とりわけ特筆すべきは、従来、「道徳感情主義」(moral sentimentalism)の代表格としてハチスン、アダム・スミスと並んで解釈され、評価されることの多かったヒュームを、「言語」を道徳判断の根幹に置く哲学者として捉え直す新機軸を本論文が提供している点であろう。これは、既存のヒューム研究に新しい視座をもたらすばかりではなく、現代のメタ倫理学との接続、そして、その展開に寄与するものであることは、申請者も指摘しており、高く評価されるべき功績である。さらに、そこからの帰結として、ヒュームの道徳哲学においては、道徳的判断は感情を起点としつつも、言語によって作り出されるものとして考えられていたことをテキストの緻密な分析を土台に明確に指摘した上で、そのように作り出された道徳が「普遍性」「客観性」を有し、さらには何らかの規範性を持つことが期待されるが、それは感情と理性を混同する「錯誤論」によって支えられており、何らの実質も持たないという、申請者の言葉を借りるならば「悲観的」な結論に至る。しかし、ここで申請者は、現代のメタ倫理学で活発な議論が展開されている「規範性」という概念そのものへの疑念を提示し、ヒュームの道徳哲学は、常識的な道徳の「解剖学」として展開されたのであって、その解剖学なくしては「あるべき」道徳の姿が明らかにならないという、深い反省に基づく主張で本論文を締めくくっている。ここに、本論文が従来の解釈並びに既存の研究と一線を画す独創性を見いだせると同時に、今後のヒューム研究のみならず、メタ倫理学の展開へ寄与するところが大きいと評価できる。

さらに、本論文で最も注目を惹くのは、ヒュームの「一般的観点」についての新しい解釈である。従来の解釈では、ヒュームの「一般的観点」は、アダム・スミスの「公平な観察者」(impartial spectator)と同様に、道徳的判断が「共感」をその根幹に置くゆえに主観的にならざるを得ないことの防波堤として、道徳的判断の客観性を担保するために導入されたものとして理解されてきた。しかし、本論文では、その解釈を一新し、一般的観点が、われわれが他者に対して期待できる配慮の範囲(narrow circle)を定める根拠となり、このことが、一般的観点が現実の、そして個別的な道徳的判断の場面において、道徳が要請する对人的配慮の範囲を実質的に規定する機能を果たすという新しい解釈が提示される。この新解釈によって、道徳的判断はあくまでも個別的な感情に根差すがゆえに、それを補正するために理念的に導入されたのがヒュームの「一般的観点」、そしてアダム・スミスの「公平な観察者」であったにすぎないという固定観念から脱することが可能となり、(道徳的)言語、そして、それと分かちがたい関係にあるコンヴェンションという概念が、ヒュームの道徳哲学の中で用いる効力が明らかに示されたということは、本論文の最大の功績の一つであろう。

他方、申請者の視点が独創的であることの裏返しで、参照された文献が本論文のテーマに限定される形でそれほど多くないこと、そして、最終部の8章と9章で申請者が持論を展開する局面が、学問的誠実さの現れではあるものの、禁欲的に過ぎ、もう少し論述を厚くしてもよいのではないかという指摘が審査委員会でもなされたが、その件についての申請者の応答は、感じられる不足を十分に補っているばかりではなく、今後の研究の進展を期待させるものであった。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。